

◆ 「字音仮名遣いの戦中・戦後—海外邦字新聞における—」

井口 佳重

〔要旨〕

「現代かなづかい」の制定前及び制定後、海外で発行された邦字新聞での字音仮名遣いからは、日本国内の新聞各紙の表記法が波及する現象が見出される。本発表では、こうした現象のプロセスに内在する表記上の特質を明らかにすることを目的とした。

明治三十三年、大阪毎日新聞社社長の原敬が「ふり仮名改革論」を発表し、この改定案を軸に同紙上にて字音仮名表記の改定を行う。その表記法は内地及び日本統治下の他紙に波及するが、ここでは活字の印刷技術や国語の施策との関連性が観察された。これらを踏まえ、本発表では、国内での情勢がどのように海外に波及したのかを検証するために、戦中に日本の占領地で発行された邦字紙、戦中から戦後にかけて内地からの移民形成社会で発行された各地の邦字紙を対象として、それらの字音仮名遣いの表記法を調査した。

本調査から判明したことは、次の通りである。

(一) 占領地の邦字紙では、紙面印刷の際に要する活字は、委任

運営である内地の新聞社のものを使用している。このことから、原改革案そのものが受け入れられたものではないと考えられる。

(二) 移民社会の邦字紙では、その多くが「現代かなづかい」制定後の二十年以上もの間、歴史的仮名遣いを使用し続け、それらの改定時期には各紙で差違がみられる。その結果、情勢がそのまま波及するのではなく、各コミュニティそれぞれに個別の事情があったということが明らかになった。